昭和女子大学現代教育研究所紀要　第 8 号　93～101（2023.3）

《実践報告》

地域子育て支援拠点における活動を通した保育実践力の育成
～焼津ターントクルこども館における学生の活動を例に～

佐々木　郁子（現代教育研究所研究員　静岡福祉大学 子ども学部）

1. はじめに

我が国の子育てをめぐる問題点として、3 歳未満児を育てる保護者の半数以上が、地域と関わりがないと悩んでいること、核家庭が進んでいることから孤独になりやすいこと、父親の協力を得ることができず、母親が 1 人で子どもと向き合うことに負担を感じていること、母親が一人で行う子育ては孤立しやすく、子育てに自信がなくなってしまう人や不安感に覆われてしまう人がいること、子ども自身も様々な人と関わる機会が少なくなってしまうことが指摘されている（自治体通信 ONLINE 40号）。これら諸問題を背景として、厚生労働省が主体となり、地域子育て支援拠点事業を実施している。

地域子育て支援拠点事業は、児童福祉法に基づく子育て支援事業の一つであり、児童福祉法第 6 条の 3 第 6 項には「この法律で、地域子育て支援拠点事業とは、厚生労働省令で定めるところにより、乳児又は幼児及びその保護者が相互の交流を行う場所を開設し、子育てについての相談、情報の提供、助言その他の援助を行う事業をいう」と定義されている。なお、社会福祉法における第 2 種社会福祉事業としても位置付けられている。また、2014年度（平成26年度）に厚生労働省から発表された「地域子育て支援拠点事業実施要綱」には、地域子育て支援拠点事業の目的について、「少子化や核家族化の進行、地域社会の変化など、子どもや子育てをめぐる環境が大きく変化する中で、家庭や地域における子育て機能の低下や子育ての中の親の孤独感や不安感の増大等に対応するため、地域において子育て親子の交流等を促進する子育て支援拠点の設置を促進することにより、地域の子育て支援の機能を図り、子育ての不安感等を緩和し、子どもの健やかな育ちを支援することを目的とする」と述べられている（厚生労働省，2014）。

厚生労働省から発表された「平成28年社会福祉施設等調査」によると、児童福祉法に規定された施設の中では、保育所が約23,000ヶ所、児童館が約4,600ヶ所あるが、地域子育て支援拠点は近年急速に拡充され、2016年（平成28年度）には全国に7,000ヶ所以上に達している。事業類型については、当初「センター型」、「ひろば型」、「児童館型」の 3 種類による事業類型であったが、現在では「一般型」、「連携型」の 2 種類に整理されている。一般型は、常設の地域の子育て支援拠点を設け、地域の子育て支援機能の充実を図る取り組みを行い、連携型は、児童館等の児童福祉施設等多様な子育て支援に関する施設に親子が集う場を設け、子育て支援のための取り組みを行う。

以上のように整備された制度のもとで、現在では、全国に様々な地域子育て支援拠点がある。

例えば、神奈川県横浜市の「おやこの広場びーのびーの」では、会員同士による子どもの預かり合いなど利用者のニーズを反映した様々な企画を自ら立案・実施しながら、スタッフとの合同ミーティングを通じて積極的に運営に参加している。

また、千葉県市川市の「さかえ・こどもセンター」は、さかえ第 2 風の谷保育園内に設置され、保

育園、子どもセンター、地域交流の 3 つの機能を持つ出会いと発見の場として位置づけられ、同じ話題を共有できる同年齢の親子が出会えるように年齢別に曜日を分けて運営している。

焼津市には、2021年 7 月に焼津ターントクルこども館が開館した。ターントクルこども館は、静岡県焼津市栄町に所在し、昔ながらのおもちゃと絵本、伝承遊びなどを多世代で楽しむことができる地域子育て支援拠点施設であり、施設内には「こども図書館 やいづ えほんと」、「焼津おもちゃ美術館」が配置されている。「こども図書館 やいづ えほんと」では、「えほんと出会い」、「えほんと創造」、「えほんと安心」をコンセプトにして絵本を通じた多様な体験が提供される。「焼津おもちゃ美術館」は多世代が楽しめるおもちゃと遊びの体験型美術館であり、木や身近な素材で作るおもちゃや日本の文化を学べる遊びなど、実際に遊んだり作ったりできる様々なイベントを毎月開催している。

2. 研究の目的と方法

地域子育て支援拠点事業には、その地域にある大学が関わることも求められている。筆者の勤務する大学は、保育者養成、教員養成も行っていることから、地域子育て支援拠点事業に積極的に関わることが求められているといえる。そこで、保育者養成、教員養成を行う大学の地元地域への貢献として、学生がボランティアなどを行うことが考えられる。しかしながら、ボランティア活動は行うだけで意味があるものと考えられ、その活動がどのような意味を持つのかについて検討されないことが多いように感じる。そこで、焼津ターントクルこども館で行った学生のボランティア活動が、学生にとって、どのような学びとなり得るかを明らかにすることを本研究の目的とする。

まず、学生が焼津ターントクルこども館において活動内容についての説明を受ける。焼津ターントクルこども館においてボランティア活動を行うためには「おもちゃ学芸員・えほんとサポーター」資格を取得する必要がある。この資格を取得するためには、同館が行う「おもちゃ学芸員・えほんとサポーター養成講座」を受講して修了する必要がある。そこで、学生に本講座を受講してもらう。その後、学生は実際にボランティア活動を行う。後日、活動の様子と、活動を行った感想を学生にインタビューし、その内容を記録する。最後に、記録された内容をもとに、地域子育て支援拠点における学生のボランティア活動が、学生にとってどのような学びになり得るかについて考察する。

3. 結果

保育者養成校の 2 年次に在籍する学生 3 名が本実践に参加した。

［1］焼津ターントクルこども館の見学

3 名の学生は、2022 年 5 月 13 日（金）（15：20～16：00）に焼津ターントクルこども館において館内説明を受けた。当日は、サブチーフディレクターから館内の環境や設計について説明された後、館内を見学した。最後に、実際に行われていた絵本の読み聞かせのボランティア活動を見学した。翌週、学内において、焼津ターントクルこども館での館内説明、見学について感想を述べ合い、ボランティア活動の具体的な内容と意義について話し合った。

見学後の学生の感想は、「グットトイで選ばれた、紐を引くドミノが飾られていて、そのドミノは障害の子どもにも配慮されたおもちゃだそうで、障害児が楽しめるおもちゃが作られているところが良いと思った」、「乳幼児の子どもや小さい子どもだけが入れる場所があり、安全に安心して遊べるよ

うにヒノキで作られていた。匂いと感触がとても優しい感じに作られているところが良いと思った」、「おもちゃで農業体験できるおもちゃがあり、近くのカゴに入れて実際に収穫できる気分が味わえて、初めて見る斬新なおもちゃに感動した」、「昔からあるブリキ製のおもちゃがたくさん展示されていて、初めて見るものばかりで感動した。ガラスケースに飾られているため実際に触ることはできなかったが、昔のおもちゃを見ることができてよかった。また、コマやけん玉の種類がたくさんあり驚いた。自分がまず遊んでみたいと思った」など、様々な感想が出された。

続けて、ボランティア活動の具体的な内容と意義について話し合った。学生から、「子どもと一緒に遊んだり、親子とかかわったりすることで、様々な場面で自分だったらどのように対応するのかを考えることができる、そのような体験から自分自身の保育観が見えてくるのかもしれないのではないか」、「館内には階段や段差、死角があったので、遊びに来ている子どもが怪我をしないように、見守ったり、声をかけたりすることが大事なのではないか」、「実習前に絵本の読み聞かせや手遊びの練習ができるのではないか」、「ボランティア活動にはいろんな世代、様々な経歴のスタッフがいるため、ボランティア活動を通して人間関係や様々なスキルを学ことができるのではないか」という意見が出された。

［2］講座の受講

焼津ターントクルこども館でボランティア活動を行うためには、当館が独自に実施している「おもちゃ学芸員・えほんとサポーター養成講座」を受講する必要がある。2022年度は、5月28日（土）、29日（日）の二日間（両日ともに10：00～16：00）、静岡県焼津市役所本庁舎において実施された。初日に行われた内容は、館内ツアーやけん玉遊びも含め、「ターントクルこども館の概要」、「おもちゃ美術館総論」、「おもちゃの遊び方実践」、「グッド・トイ」、「おもちゃと遊びの文化継承」についての講義・実習である。翌日に行われた内容は、「おもちゃ美術館から発信する木育」、「子育て支援のおもちゃ活用術」、「手作りおもちゃ体験」、「書架編集概論・実践」についての講義・実習である。以下、各内容について述べる。

（1）ターントクルこども館の概要

設立までの経緯や建築デザインコンセプト、ターントクルこども館管理運営計画における基本方針について説明が行われた。焼津おもちゃ美術館は、全国初のこども図書館併設型のおもちゃ美術館であり、全国最大級の「木のたまごプール」や「八丁櫓」と呼ばれる焼津伝統の和船をモチーフにした木の遊具、焼津の市場をイメージした空間には寿司のカウンターなどが整備され、漁業のまち・焼津の文化や歴史を感じられる遊びが体験できる。

（2）おもちゃ美術館総論

まず、全国に展開している姉妹おもちゃ美術館とのつながりと広がりについて、次に、おもちゃ美術館が大切にしている多世代交流、文化継承、地域活性拠点、市民性公共活動の場づくりとしてのおもちゃ学芸員の役割についての説明を受けた。

（3）館内ツアー

各展示のコンセプトや様々なおもちゃの遊び方についての説明を受けながら館内を見学した。まず、1 階及び中 2 階のこども図書館では、絵本の分類の仕方や展示方法、どのような意図でこども図書館が作られたのか説明を受けた。2 階及び 3 階のおもちゃ美術館では、年齢に合ったおもちゃの選び方や遊び方、遊ぶ際の注意事項や遊んでいる際の保護者に対する言葉かけなどの具体的な活動内容の説明を受けた。館内ツアー後、現在ボランティア活動をしているおもちゃ学芸員の方からお薦めのおもちゃが紹介され、実践により一つのおもちゃから様々な遊びが展開できることについて説明を受けた。

（4）グッド・トイ

芸術と遊び創造協会（NPO法人）が発行する「グッド・トイガイド」を参照しながら、東京おもちゃ美術館が推奨するおもちゃについて、選考の目的や選ぶ人たちについて説明を受けた。また、東京おもちゃ美術館の「遊び方動画100」では、アプリをスキャンすることにより、スマートフォンをかざすと遊び方を動画で見ることができることが紹介された。

（5）おもちゃと遊びの文化継承

まず、日本や各地域に伝わる伝承遊びの良さやおもちゃ遊びから日本の伝承文化を継承していく大切さについて、次に、現在、地域おこし協力隊として、伝承遊びを伝えることも含めて様々な活動を行っている隊員から、けん玉の遊び方について説明を受けた。その後、受講生一人ひとりにけん玉が手渡され、簡単な玉のせから少し難易度の高い技まで実践し、伝承遊びであるけん玉の楽しさや奥深さを体験した。

（6）おもちゃ美術館から発信する木育

木育が子どもたちにどのような影響を与えるのかについて説明を受けた。さらに、木に触れることの心地よさだけではなく、木の魅力・大切さを子どもたちとその保護者に分かりやすく伝えるための木育の基本について説明を受けた。その後、受講者が実際に木のおもちゃを手にとり、においを嗅いだり、木の種類による温かさを感じたりしながら、一つのおもちゃで様々な遊び方があることも学んだ。

図1. おもちゃ美術館から発信する木育講座様子
（写真提供：ターントクルこども館）

（7）子育て支援とおもちゃ・絵本活用術

絵本を通して遊びを広げる方法について説明を受けた。例えば、絵本「ぎょうれつぎょうれつ」では、主人公の少年がおもちゃを並べることを楽しむ様子が描かれており、その絵本を通して遊びを展開する方法について学んだ。

（8）手作りおもちゃ体験

「姉さま人形」と「わっかの飛行機」を製作した。これらの製作を通して、身近な素材を使って作

るおもちゃづくりが何故必要なのかを考えながら、ただ作ることを目的とするのではなく、出来上がったおもちゃを使ってどのように遊ぶのかを体験した。一つのおもちゃでたくさんの遊び方や楽しみ方を生み出すコツについて説明を受けた。

（9）書架編集概論・実践

こども図書館「やいづ えほんと」（書架編集概論・実践）では、「やいづ えほんと」のコンセプトや基本方針、えほんとサポーターの役割、「やいづ えほんと」における絵本を通じたサービスについて説明を受けた。さらに、子どもを第一に考える図書館のサービスの在り方について説明を受けた。

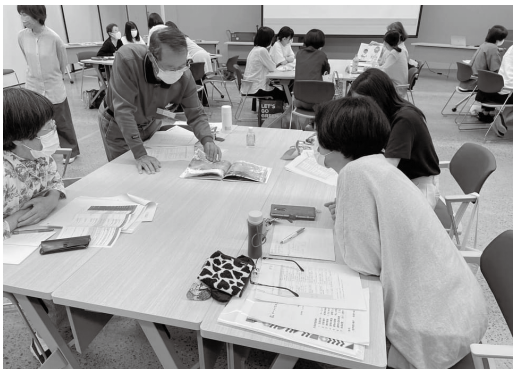

図2. 書架編集概論・実践講座の様子
（写真提供：ターントクルこども館）

その中で「書架編集概論・実践」では、「やいづ えほんと」におけるテーマ架配に向き合い、効果的な活用と接続的な管理運営について実践的に学んだ。実際にグループごとに絵本を１冊選び、グループ内でその絵本を読み聞かせし、一人ひとりが内容を理解した上で、どのカテゴリーに分類されるかを考えた。グループごとに前に出て、絵本の読み聞かせをした後にカテゴリーした理由を発表し、討論した。

（10）振り返り

振り返りでは、受講生が二日間の講座を通して学んだことや感じたこと、今後の活動について意見を伝え合った。各グループの感想や今後の活動について、「SNS時代だからこそ直接いろんな人と関わりたいと思った」、「自分もみんなに元気を与える存在になりたいし、自分もみんなから元気をもらいたい」、「来てくれる子どもや保護者のためにたくさんの遊びを学びたい」、「自分の発想を自由にして表現してみたい、それを形にしたい」、「子どもだけではなく、保護者の子育て支援に繋がったら良いと思う」、「視覚障害や聴覚障害のある子どもに対して、絵本を音訳して届けることはできないか、また、障害を持っている保護者が子どもを連れてこども館に来るのが難しい場合は、遊びや絵本の読み聞かせなどを録音して届けたい、健常や障害関係なく、誰でもどのような形でも良いからこども館を利用できるといいと思う」などの意見が出された。

最後に、ボランティア活動を行うにあたり、登録の方法や保険の内容や加入方法についての説明を受け、今後行うボランティア活動の内容や、利用者とのかかわり方についての注意事項、言葉かけについての助言を受けた。さらに、「えほんと読み聞かせの会」、「いとのこ友の会」、「からくりおもちゃの会」など、学芸員同士が自主的に有志を募り活動していることも紹介された。

［3］ボランティア活動の内容と結果

指定講座の受講を修了した３名の学生が、ボランティア活動を行った（３名をA,B,Cとする）。Aは６月18日（土）、及び、６月26日（土）の二回（いずれも９：30～13：00）、Bは６月18日（土）、及び、６月28日（月）の二回（いずれも９：30～13：00）、Cは７月26日（火）（13：00～16：30）にボランティア活動を行った。

（1）活動内容

活動に参加した学生から、活動内容をレポートにより報告してもらった。以下に、参加した 3 名のうち、1 名の学生の報告を示す。また、文章の表現は変えていない。

活動当日は、「木の大海原」、「お寿司屋さんコーナー」、「くっつき虫のコーナー」、「テーブルサッカー」、「ボードゲーム」、「畑のコーナー」を担当した。

木の大海原では、子供とコミュニケーションを取りつつ水揚げされた魚たちを海へ戻したり、戻す際にも周りの子供たちを遊びへ巻き込めるようにかくれんぼのような感覚で魚を見つけたりしてもらうよう声掛けを行った。

お寿司屋さんコーナーでは、保護者と子供のコミュニケーションを阻害しないように心掛けたり、たくさんの人に遊んでいただけるよう使い終わったら元に戻したり、ひとりの子には声をかけお寿司を握ってもらうなど子供の独創性のあるごっこ遊びを見守る立場に徹するよう配慮した。

くっつき虫のコーナーでは、遊んでいる人数が少ない場合チンアナゴの量をあまり気にかけなくてもよかったが、大人数になると取りつくしてしまい次の子が遊べないので「おうちに返してあげよう」や「誰が早く戻せるかな」とゲーム性を付け加えてお片付けも楽しんでもらえるような関わりが必要であると感じた。

テーブルサッカーでは、子供の年齢によって少しルールを変えたり、対戦相手になったりと本気で遊ぶことがあった。

ボードゲームでは、かなり難しいものもあり一緒に試行錯誤をし、解けたときの成功体験をともに味わうことができとても楽しく感じた。

畑のコーナーは、低年齢の子から小学生くらいまでの子に幅広く人気で、収穫のための籠が人数分足りない場合や、収穫物がなくなることが多かったため、収穫しレジを通した後「大きなトマトがなるよ」「おいしいイチゴになあれ」と木に戻してもらえるような声掛けを行った。

（2）ボランティア活動後の振り返り

次に、ボランティア活動後に自由記述で振り返ってもらった。その内容を示す。ここで、後に考察を行いやすくするために、各学生の振り返りに対して、それぞれに学生に対して内容のまとまりごとに、【A−1】、【A−2】、…、【B−1】、…等のようにコードを付したが、学生による文章の表現は変えていない。

学生 A の振り返り

【A−1】テーブルサッカーのコーナーで、とある男の子が人数の関係で一人順番待ちをしているときに声を掛けてみたら兄弟やお母さんたちと一緒にやれなかったことが悔しいのと同時に寂しかったようで泣き出してしまいそうな様子だった。順番が来るまでお姉ちゃんと練習してみようと言うと最初は戸惑っていたがその後、笑顔が戻りとても楽しそうに白熱した戦いをしてくれた男の子でしたが、昼の入れ替えの時間になりまた来てねと言うと「まだ一緒にいる」とかなり泣いてしまいどう対応すべきかとうろたえていたところ、男の子のお母さんが来てくれて納得したように最後は可愛くバイバイとしてくれたのでほっこりとして見送ることができた。また、何人かの子に名前を覚えてもらえ「ななみお姉さん」と親しみを持ってくれたことがうれしく印象に残っている。

【A-2】子供と関わるなかで大人の目線の正しい遊び方をしなくてはいけないと思ってしまっている部分があったため子供独自の世界や独創性に溢れる素敵な空間を崩してしまいそうだったことは今後改善していかなければならないと感じます。大人になってしまった今では少し難しいですが、心と頭をもう少し柔らかくして子供と同じ目線から物事を捉えられたら良いなと思いました。

【A-3】一つのおもちゃでも三者三様の遊び方がありこのボランティアでは学ぶことが多かったです。20歳になってしまった今では子供と全く同じ感性を持つことは困難ですが、子供がどうしたいのか、どうすればもっと楽しめるのかと思いを汲み取り、想像力を働かせることは昔よりはできると思いますのでより心掛けていきたいと感じました。また、来館するお客様は様々な方がいるため臨機応変な対応力と、子供についていける心身の瞬発力が重要であると実感しました。お客様を飽きさせないエンターテイメントのような役割があると感じ、多世代交流の場に相応しいサポーターになりたいと感じます。

学生Bの振り返り

【B-1】初日に対応した男の子が、その場を離れた私を「あのお姉ちゃんどこ？」とわざわざ探して呼びに来てくれたことが嬉しかった。

【B-2】自分から絡みに行ったり話しかけにいくことが苦手なため、少しずつ慣れたいと思った。

【B-3】周りの目がどうしても気になってしまう私にとっては「楽しい」よりも「大変だな」「嫌だな」というマイナス面を感じてしまうことが多いため、無理なく楽しみながら活動できたらいいなと思った。笑顔で楽しんでいる子ども達を見ていると、こちらも自然と笑顔になり元気をもらっているなと感じた。

【B-4】遊び方（道具の使い方）やルールのある遊びが多く見受けられたため小学生くらいの子供と保護者が熱中して遊んでいる印象が大きい。そのため、サポーターとしても遊び方を把握していたほうがお客様と積極的に関われるのではないかと思い職員へ質問を行ったり、実際にプレイをさせていただいたりして遊び方を把握することができた。

学生Cの振り返り

【C-1】最初に準備として3Fのおもちゃを、お客様が「すごい！」「やってみよう！」と興味を持ってもらえるように組み立てたり工夫して配置をした。

【C-2】1階にあるえほんとのコーナーでは、おもちゃ美術館の開館前を待つお客様が多く待ち時間を楽しんでいただけるよう絵本の読み聞かせを行った。緑色のカーペットへ所狭しと並んだお客様を前に読み聞かせをするのはとても緊張したが、絵本の内容に合わせて子供たちがリアクションを返してくれることで一方通行ではないことが実感できてとてもうれしく感じた。

【C-3】準備完了後に先輩学芸員さんからおもちゃの遊び方を伝授してもらったり一緒に遊んだりもした。

【C-4】2階はすべてのコーナーでどんな年齢の子でも楽しむことができるフロアであるため、小さい子の遊び方と、比較的大きな子との遊び方、関わり方では変わるため臨機応変な対応が求められると思った。

4. 考察及び結論

ボランティア活動後の振り返りの内容をもとに、学生にとってどのように学びとなったのかを考察した。その結果、5 つの示唆が得られた。

第一に、【A-1】の「最初は戸惑っていたがその後…（中略）…見送ることができた」から、学生が悔しくて悲しい思いをしている子どもの気持ちを受け止めながら丁寧にかかわることで、子どもに安心感を与えることができたといえる。また、【C-1】の「お客様が「すごい！」「やってみよう！」と…（中略）…工夫して配置をした」から、子どもの興味・関心を引き出すためには、どのようにおもちゃを配置すればよいのかを考え、工夫しているといえる。このことから、学生は子ども達が安全に安心して遊びに集中し、遊びの幅を広げるためには、人的、物的環境が重要であることを学んだと考えられる。

第二に、【A-2】の「大人の目線の正しい遊び方を…（中略）…素敵な空間を崩してしまいそうだった」、【A-3】の「一つのおもちゃでも…（中略）…このボランティアでは学ぶことが多かったです」「子供がどうしたいのか…（中略）…心掛けていきたいと感じました」から、遊び方が多少異なっていたとしても、子どもにとっては遊び方に正解はないため、子どもが自由に発想したり、試行錯誤したりしながら遊ぶことを否定せず、受け止める事が大切であるといえる。また、【B-4】の「遊び方を把握していたほうが…（中略）…遊び方を把握することができた」から、まずは学生自身が様々な遊び方を知り、体験しておくことで、子ども達に自信を持ってかかわることができたといえる。さらに、【C-4】の「小さい子の遊び方と、比較的大きな子との遊び方…（中略）…臨機応変な対応が求められると思った」から、一つのおもちゃでも、年齢や発達の違いから様々な遊び方があることを知っておくことが大切であり、その上で、子ども一人ひとりが創造力を膨らませ、いかに楽しく遊びの幅をひろげていけるか援助することが大切であるといえる。これらのことから、学生は子どもとかかわる際には、正しい遊び方をただ教えるだけではなく、見守ること、一緒に遊び方を探すこと、違った遊び方を提案することの必要性を学んだと考えられる。

第三に、【B-2】の「自分から絡みに行ったり話しかけにいくことが…（中略）…少しずつ慣れたいと思った」、【B-3】の「周りの目がどうしても気になってしまう…（中略）…活動できたらいいなと思った」から、自分自身の性格を客観的に捉え、他者から指摘されるのではなく、自分自身で改善点を見つけることができているといえる。また、【A-2】の「子供と関わるなかで大人の目線の正しい遊び方を…（中略）…改善していかなければならないと感じます」から、実際に子どもと関わる中で自分の知識や思い込みだけでかかわるのではなく、目の前の子どもの様子からどのようにかかわればよいのかを学ぶことができているといえる。このことから、学生は直接子どもとかかわる中で、自らの欠点や不足している部分を認識し、改善しようとする態度が見られる。

第四に、【A-1】の「順番が来るまでお姉ちゃんと練習してみようと言うと…（中略）…白熱した戦いをしてくれた男の子でした」から、その場の状況や子どもの表情を読みとり、周りからの評価を気にすることなく、自分の思うように対応していたといえる。また、【C-2】の「子供たちがリアクションを返してくれることで…（中略）…とてもうれしく感じた」から、まずは、正しいかかわりなのかを考えず、子ども達とのやり取りを楽しんでいることもわかる。これらは、大学の授業で行われる保育や実習とは違い、評価を気にしたり、対応の正解を探したりするのではなく、まずは、自分の思うようにかかわる中で、結果的に自分に対して子どもが安心して自己表現をしてくれることが自信

に繋がっていることの現れであると考えられる。

第五に、【B-4】の「サポーターとしても遊び方を把握していたほうが…（中略）…遊び方を把握することができた」、かつ、【A-3】の「お客様を飽きさせないエンターテイメントの…（中略）…相応しいサポーターになりたいと感じます」から、子どもや保護者とのかかわりを通して、支援者としてどのようなことが必要なのかを理解しているといえる。また、【C-4】の「小さい子の遊び方と…（中略）…臨機応変な対応が求められると思った」から、様々な子どもや保護者とかかわる中で、その時の状況によって、対応を考えていくことが大切であるといえる。このことから、学生にとって子どもとかかわることとはどのような事なのか、また、どのような技術が必要なのかを考えるきっかけとなったと言える。

以上、考察した５つの内容は、いずれも保育実践で求められることから、焼津ターントクルこども館でのボランティア活動が、学生の保育実践力の向上に寄与することが示唆された。

謝辞

本実践にあたり、焼津ターントクルこども館の館長 堀内千穂氏、副館長 橘高春生氏にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

引用文献

特定非営利活動法人 びーのびーの，https://bi-no.org（2022年６月11日 最終確認）

自治体通信ONLINE，40号，地域子育て支援拠点事業 自治体事例の教科書,2021.05.25.
https://www.jt-tsushin.jp/article/casestudy_kosodateshienkyoten/（2022年４月９日 最終確認）

厚生労働省　雇用均等・児童家庭局，地域子育て支援拠点事業の実施について，2017年４月３日，
https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000
Koyoukintoujidoukateikyoku/0000103063.pdf（2022年６月11日 最終確認）

厚生労働省　平成28年 社会福祉施設等調査の概況（2022年７月28日 最終確認）
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/16/index.html

厚生労働省　地域子育て支援拠点事業とは（概要）
https://www.mhlw.go.jp/content/000963074.pdf（2022年７月26日 最終確認）

さかえ・こどもセンター，http://genki365.net/gnki06/mypage/index.php?gid=G0000012（2022年６月４日 最終確認）